

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：S R S株式会社

定 価：一部 30円

2011年 11月20日

第 343 号

「3つのlife」の支援

つばさ静岡

施設長 山倉 慎二

重症心身障害児施設の事は重症児者の「life」の支援です。一言で「life」と言っても、この単語にはさまざまな意味があり、その中から3つの大きな意味を選んで、私はこれを「3つの「life」と呼んでいます。

一つ目の「life」は「命」です。「命」の支援のキーワードは「楽に」です。重症児者の命を支えるためには、日頃の健康管理、医療的ケア、投薬、予防接種、検査、リハビリなどの医療だけではなく、生きるための基本である呼吸や食事にも多くの支援が必要です。重症児者の中には楽に呼吸をするために、吸引を必要としたり、気管切開や酸素投与、さらには人工呼吸器管理下にある方もいます。呼吸は生きるために片時も休むことなく続ける生命活動ですから、呼吸が「楽でない」ということは、生きることそのものが苦しいと言っているのと同じです。生きることが苦しいだけでしたら、誰も生きていたいと思わないでしょう。また食べることも同様です。重症児者は食事に介助が必要だけでなく、摂食や嚥下が困難な方が多く、食べるという

行為そのものが苦しく、つらく、できれば避けて通りたい行為にすらなり得ます。楽しいはずの食事が苦痛や恐怖でしかなくなるのです。このため実際に食事を拒否するようになったり、特定の食品(食べにくい食品)だけは絶対に食べないということがままあります。こういう行動は彼らのつらい食事に対するささやかな抵抗であって、決してわがままを言っているわけではないのです。その場合、食事を提供する側の私たちが、原因を探って歩み寄る必要があります。しかし、食事をする際に明らかな呼吸困難が出現し、誤嚥や窒息の危険性が高まってくると、ついには口から食べることをあきらめなければなりません。管を通して栄養を注入するしか方法はなくなり得ます。ただ私たちは、安易に食事をやめるのではなく、最後の最後まで、一口だけでも食事を続ける可能性を追求し、努力は続けていかなければと思っています。楽に生きることができるよう支えることはすべての支援の基礎と言えます。

二つ目の「life」は「生活」です。「生活」支援のキーワードは「気持ちよく」です。朝、起床し、着替えをして顔を洗い、身支度を整えて生活がスタートし、入浴、トイレ、歯磨き、毎日のあらゆる場面に生活の支援が登場します。ある男性職員に教えられたことがあります。介護の仕事を始めるとかあ

彼が大便の処理をしているときに、「大便の処理って、仕事と思わないとなかなかできないでしょう」と話しかけたところ、彼にこう言い返されました。「おむつの交換は、便をみているとなかなかできないけど、この方を見ていると自然にできるんですよ」と。直接介護の仕事をしたことのない私にとっては、「人を見ること、つまり、その人が気持ちよくいられるかどうか」が介護の基本にある」と改めて気づかされる一言でした。

そして、3つ目の「life」は「人生」です。そのキーワードは「楽しく」です。あるいは「笑う」でもいいかもしれません。たとえ呼吸が楽で、食事を難なく食べれたとしても、トイレや入浴、更衣などの十分なケアをされていたらとしても、それだけでは人生は無味乾燥なものになってしまいます。外に出て自然とふれあい、人と出会い、ショッピングやイベントを楽しみ、目で見てあるいは音を聴いて感動し、何か心躍らせるような体験をし、四季折々の行事を楽しむ、こういうことがなければ生きていく実感は得られないだろうと思います。一人ひとりの重症児者が「人生」を謳歌できるように支援することは、決してマニュアル化できるものではなく、まさに職員の力量が問われます。しかし言い変えれば、このような支援こそ重症児施設職員冥利に尽きる仕事と言えるのではないのでしょうか。

# 大規模震災を考える

2011年、東日本大震災は世界の多くの人たちに大きな衝撃を与えました。私たちもまた、被災地を訪ね、あるいは報道などから様々な情報を得る中で、様々なことを思い巡らしました。年末を前に、被災地でのワークを通して感じたこと、震災から学び小羊学園が今検討していることをまとめてみることにしました

## 被災地レポート

つばさ静岡 事務長 羽山 純

10月前半の3連休を利用して、5月の連休以来2度目となる被災地支援を法人職員4名で出掛けた。被災から7ヶ月近くになる現地は、多くのところで、瓦礫が片付けられてはいるものの、再開の動きを感じさせるものは少なかった。

南三陸町の災害ボランティアセンターにはその日200人あまりのボランティアが参加していたであろうか。それが数グループに分けられそれぞれの活動現場にむかった。重機が一通りの作業をした後とのことだったが、大きな瓦礫とともに、家の基礎がそのままのところもあった。

4時間を越えて瓦礫と土砂との格闘をしていると、身体は疲れていくのだけれど、気分はむしろハイになっていて、数十人のボランティアが活動する現場は一種のお祭り騒ぎ（それは黙々と続く作業なのだけれど）になっていく。



私たちが片付けた『瓦礫』は、コンクリート片やかかわら、壁材の破片などが主なものだった。けれどそうした無機質な『瓦礫』の中から時折、衣服やレコード、調理道具など、生活の痕跡を強く感じさせるものが出てきて、作業の手を鈍らせる。そういうものを見る



と、自分たちが今片付けているものは「瓦礫」ではなく「誰かが生きた証」なのだというところに気づかされる。

今作業をしているこの家のかつての住人が今どうしているのか、どこからか流れ着いたに違いない衣服の持ち主は今どうしているのだろうか、彼らは、私たちのこの作業をどんな思いで見ているのだろうか。それは、決してボランティアへの感謝というような単純なものではないだろうと思う。

本来の中心市街地は壊滅状態で、少し離れた高台に新興の商工業団地、住宅街、中心地から避難してきた仮設住宅、町の行政機能などが肩を寄せ合っていた。

宿泊した高台にあるホテルは、震災直後は避難所になっていたというが、再開以来始めてという満室で客があふれていた。

ホテルのスタッフの中にも被災した人たちがいると聞いた。荒廃したままの中心市街地（そこには多くの思い出が詰まっているだろう）を通して、仮設の住居と客であふれるホテルを往復する生活のなかで、彼らはどのようにして心のバランスを維持するのだろうか。震災直後の混乱が一段落して、今はそれぞれの現実に向き合わねばならない。一人ひとりの思いは生活の背景に、一人ひとりの思いの奥に沈んでいくのではないだろうか。朝食を笑顔で接待してくれるこの人たちの複雑で



ボランティアセンターにて左端が筆者

あろう胸のうちは、私たちには簡単には思い及ばないところにあるのだろうか。5月の訪問のとき、現地の人たちから、支援からの自立を模索する声を聞いた。助け、与えるだけの支援であれば、それはもう終わりにすべきかもしれない。しかし、一人ひとりの思いに寄り添って一緒に歩むことはむしろこれから必要になってくるように思う。それは今回のような2、3日の訪問でできるようなことではないことは明らかだが。

いつか訪れるに違いない東海地震地域に住む私たちは、今回の出来事から多くのことを学ばなければならぬ。けれど、東北の震災はまだ何も終わってはいない。それを横目で見ながらせと自分たちの備えを始めるのには後ろめたさのような戸惑いがあることも確かだ。

## 大規模災害を想定して

支援センターわかき

副施設長 古橋 誠

いつ起きてもおかしくないとされている「東海地震」。この東海地震に南海地震・東南海地震が3連動する可能性も示唆されています。3連動地震が発生した場合は、マグニチュード8・5規模となり、直下地震による建物倒壊に加え東日本大震災同様の津波が押し寄せてくることが予想されています。私たちが住む静岡県中西部は、東海地震の震源区域に位置し、エリア全体に甚大な被害が及ぶ可能性が高く、今回の東北地方の被害状況は決して「対岸の火事」ではないはずで

す。小羊学園が支援している知的障がい・重症心身障がいの方たちは、日常生活でも生命維持、身辺介護や社会生活上の支援を必要とする人たちであり、大規模災害時には災害そのもので命をとり止めたとしても、その後の支援がなければ生命の危機に直面します。全県下、もっと拡大して東海・近畿・四国地方など広域に被害が及び、周りを見渡せば全てが被災者となる中で、災害弱者となり得る障がいをどう支えていくべきかシミュレーションを踏まえながら執行役員会で検討した内容と浮き彫りになった課題を報告します。

### ■物資・薬品等の確保

災害が広域化すると物資補給が滞ることが予想される。在宅避難者も含め最低3日間の食料・水を備蓄すると同時に、常服薬等の医薬品保管を行う。マルカートは海岸に近く津波避難ビルの機能を有することから、近隣住民が避難してこられることも想定される。

### ■安否確認と情報網

法人本部・執行役員を中心に、災害対策本部を設置。利用者の安否確認や支援対策を検討。被災状況や安否確認や電話回線不能でも使用できる衛星電話の加入を検討。

### ■避難先の候補地確認

東日本大震災では在宅障がいの安

否確認が思うように進まなかった。通

所利用者には、避難先候補地を第3候補まで挙げていたとき、確認作業を円滑に進められるようにする。

### ■福祉避難所

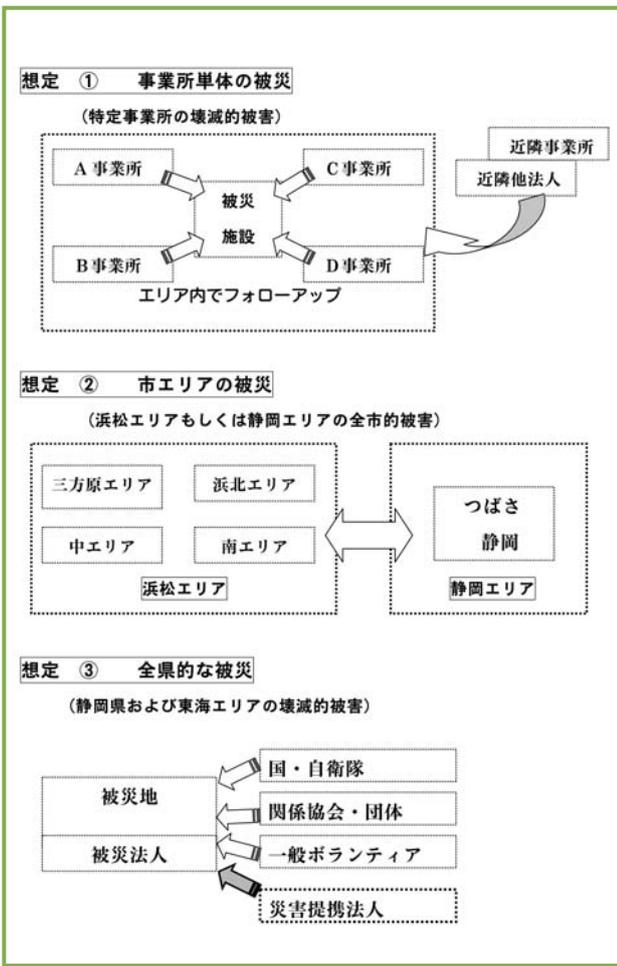
障がいのある方が一般の避難所に避難するには様々な障が生じる。福祉避難所指定を受けると、公の物資提供がされ、また、在宅障がいの受入れが可能となる。

### ■専門職員の支援ネットワーク

つばさ静岡の場合、医師や看護師等生命に直結する専門職種の専門職員不足が予測される。関係機関と相互連携がとれるネットワークを強化。

### ■災害提携法人

災害が広域化した場合、法人レベル



や圏域内の社会資源では支援体制が困難だと予想される。東日本大震災では、被災状況の把握に時間を要し、支援者派遣に滞りが見られた。東海地方を除く他地方で、災害時に相互支援が行える障がい関係法人と連携し、ピンポイントで支援を受けられるシステムを構築する。現在、候補となる連携法人を検討中。

### ■災害レベル別の支援スタッフ調整

災害規模によって、災害時基本支援体制を確認した。職員も被災者となり得ることが予想されるため、最低レベルの生命保持から被災地支援派遣が可能な日常生活維持レベルまで8段階に分けて、支援現場における対応策と職員の派遣や要請受入れを検討した。

これらは、災害直後から復興初期にかけて考えられる対応ですが、実際には想定外の課題が多々出てくるでしょうし、避難が長期化する場合には更に様々な対応が求められると思います。

東日本大震災後に、法人として岩手・宮城に2回支援に向かいました。仮設住宅等一次的生活基盤は整いつつあるも、本来の生活には程遠いはずで、建設制限が掛かり復興の見通しすら持てない人々も多くいます。

故郷を失いながらも、その故郷を取り戻そうと苦勞されている人たちを覚え、「心の支え」を中心に小羊学園が出来る事を考えたいと思います。

# 自立支援基盤整備事業 着工始まる

障害者自立支援法移行の経過措置で、障害サービス事業所の施設整備に掛かる国庫補助が今年度で最終となります。小羊学園では「支援センターわかぎ活動室増築」「ぱびるす活動室増築」の2事業を申請し決定を頂きました。11月15日に施行業者の入札が行なわれ、常盤工業㈱が落札し、11月末から工事を着工し、年度内には工事が完了する予定です。

工事が完了することによって：

支援センターわかぎでは、障害の特性や個々の能力の違いに対し、日中活動を充実するための活動場所が確保されこれまでの課題を解決することができると考えています。

ぱびるすでは、増改修によって、児童増員への対応だけでなく、各年齢層や障害特性に配慮したグループ分けが可能になり、児童へのよりよい療育支援につながると考えています。



# わかぎ秋祭り 東北の味を堪能

雲ひとつない秋晴れに恵まれ、11月13日（日）にわかぎ秋祭りが開催されました。

イベントではびわの実会のフラダンスショー、refreshによるアコースティックライブ、土屋伸太郎さんによるピアノ演奏が行なわれ、一緒に歌ったり踊ったりして楽しい時間を過ごしました。模擬店では「東北うまいもん店」を開催。喜多方らーめん、浪江やきそば、せんべい汁、芋煮コロッケ、東北がんばろうまんじゅうなどのブースが軒を並べ、東北の味を堪能しました。

また、フットケア・フリーマーケット・さをり体験、喫茶コーナー、野点、オリーブのパンや保護者会の手作りエプロン販売などが行なわれ、賑やかな1日となりました。



模擬店の売上金総額192,000円は、東日本大震災の津波で全壊した気仙沼市のグループホーム再建に寄付いたします。

# クリスマスのご案内

アドベント（待降節）に入り、各施設ともクリスマスに向けて慌しく準備が進んでいます。各施設のクリスマス情報をお知らせします。



## 三方原スクエア

キャンドルサービス  
12月16日（金）18時30分  
至 遠州栄光教会三方原礼拝堂  
記念礼拝：12月24日（土）11時

## 支援センターわかぎ

12月21日（水）13時30分

## つばさ静岡

入所部門  
12月18日（日）10時30分

通所部門  
12月23日（金）10時30分

## 小羊デイケアホーム

12月22日（木）13時

## マルカート

マルカート 12月22日（木）13時  
ドルチェ 12月23日（金）13時

## オリーブの樹

12月22日（木）10時30分

## ぱびるす

12月22日（木）11時

# 小羊学園を支える会

## 2011年度寄付金報告

10月受付分	129,580円（14件）
累計	2,845,230円（151件）

## 小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座	00800-8-107785
口座名義	社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店	当座預金0107785
口座名義	社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。  
小羊学園を支える会事務局（鈴木）  
三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

# 編集後記

秋は地域イベントが盛りだくさんの季節。浜松でも各区で「ふれあい広場」や事業所や学校のお祭りなどが開催されている。こうした行事に参加し、触れると地域の大切さを感じずにはいられない。施設に地域の人たちがお見えにならないことも重要だが、日頃から私たちが地域に出かけ、積極的に社会の中に交わりを求めていくことの方が重要ではないか。障がいのある人たちも、お年寄りも外国人も誰もが住みやすい街づくりをしていくことの大切さをイベントを通して再認識した。

クリスマスが近づいています。良い準備をもってクリスマスを迎えます。よいお身体を大切に。